

## INTERVIEW

姫島村国民健康保険診療所 所長  
三浦源太 先生



# 離島の医療 一厳しさ,そして楽しさ.

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

## 若い頃は外科医を目指して

山田隆司(聞き手) 今日は大分県の姫島村国民健康保険診療所に、三浦源太先生をお訪ねしました。実は2週間前にも大分県まで来たのですが、大雨と強風でフェリーが欠航してとうとう姫島に渡れず、改めて今日伺うことができました。

三浦源太 先日はせっかく大分まで来ていただいたのに本当に残念でした。遠くからのお客さんが来たけれど、帰れなくなったということはこれまでもありましたが、島に来られなかったというのは初めての気がします。

山田 島は見えていたのですがね。では、まずは先生の経歴を紹介していただけますか。

三浦 私は平成元年に自治医科大学を卒業し、大分県立病院で2年間、多科ローテーション研修を

受けました。当時は外科志望だったので外科を重点的に研修しました。その後当時の国保佐賀関病院で2年間、外科医として勤務しました。その病院で大分大学の外科に入局した高校の同級生と一緒にいたのですね。外科単科ストレート研修後の3年目と、多科ローテーション後の3年目というのは、やはりできることがずいぶん違うことをその時痛感しました。その後5年目の1年間は県立病院に戻り、初期専門研修で外科だけの研修をしました。佐賀関病院は外科の症例があまり多くありませんでしたが、県立病院では多くの症例を経験でき認定医もとることができました。そして6年目に姫島に赴任しました。

大分県では姫島に派遣されるのは外科系の医者という不文律のようなものがあるが、卒業生は私で5人目でしたが、私の前もずっと外科を経験した先生が勤務していました。離島なので外科的な処置もしていて、診療所内には手術室や全身麻酔の器械もあって、簡単な開腹手術はここでやっていました。

山田 ほかにも先生がいらっしゃったのですか。

三浦 ここには自治医大1期生から派遣されていますが、当時から所長の松本孝先生が長期でいらっしゃいました。松本先生は泌尿器外科を得意としていましたが、手術をするときは、大分県立病院から応援に来ていただいて自家麻酔でやることもありました。内視鏡もしていたので、自分が検診で見つけて、自分で手術をして、術後もフォローをするというような、得難い地域医療の経験ができたと思っています。

山田 若い時は少し経験を積んでくると、検査も手術もけがの処置も自分でやりたいと思うものですが、それを全てできる現場は多くないと思いますよ。

三浦 それで2年間の予定だったのが3年間いて、家族もみんな一緒にこちらで暮らして、私生活

的にも充実していました。3年間が終わった後でやはり外科医を目指そうと思い、大分大学第一外科に入局して大分大学附属病院で1年間研修しました。大分大学第一外科は、心臓血管外科、胸部外科、腹部外科の全てをやるという少し特殊な科で、各科の先生方とつながりができたのが一番大きな成果だったと思います。

山田 それが義務年限の最終学年ですか。

三浦 当時の大分県では専門研修が義務年限に含まれていなかったもので、大分県立病院と大学病院はカウントされないのです。なので、最後に県南にある県立三重病院に外科医として勤務して義務年限が終わりました。そこでは手術もいろいろさせてもらえるようになってよかったのですが、一方で在院日数の短縮が強く求められるようになっていた頃でした。ほとんどの患者さんは問題なかったのですが、まだ体制も整っていなかった時期なので、1人の患者さんが退院後に自殺してしまったのです。再発の患者さんだったのですが、フォローが十分できていなかったことを感じてかなりがっかりしたということがありました。

## 離島でもできるだけの医療体制を

三浦 そんな時に姫島から声がかかったのです。姫島の人とのつきあいはずっと続いていたので、帰るのもいいかなと思立ち、12年目の半ばに姫島に帰ってきました。

山田 その時に松本先生はまだいらっしゃったのですか。

三浦 はい、もうご高齢でしたが、基本的に松本先生と自治医大義務年限1~2人という体制でした。私が最初に赴任した時は自治医大からの派

遣は1人でしたが、そうすると研修に出られないのです。私が2度目に戻ったときには、松本先生と私、そして義務年限内の若手1人という体制になりました。その後松本先生が体調を崩されて引退したので、私と自治医大の後輩2人の3人という形になっています。

山田 12年目の半ばに戻ってきて、何年になるのですか。

三浦 平成12年からですから、20年になりますね。